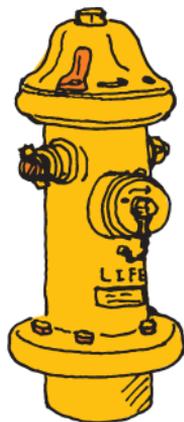


# 松島湾の遺跡図鑑

MATSUSHIMA WAN  
HISTORICAL SPOT GUIDE



TSUNAGARU WAN PROJECT

# 松島湾の遺跡図鑑

MATSUSHIMA WAN  
HISTORICAL SPOT GUIDE

## はじめに

島々と海が織りなす景色が美しい松島湾。その海の恵みを背景に、古来、湾の周囲には集落が形成され、生業が生まれ、人が暮らし続けてきました。

各時代を生きた人々はこの土地に「生きた証」を刻み続けてきました。しかしその多くは長い年月の間に土に深く埋もれ、私たちはその存在に気づくことができません。何かの拍子に見つかったとしても、私たちはその意味をすぐに理解することはできません。だからそれを探し出して読み解いてくれる専門家の存在が必要なのです。この本では、専門家たちが時間をかけて探し出し、読み解いてきた成果のほんの一部を紹介しています。

この本を手にしたら、ぜひ、近くの遺跡を訪れてみてください。その場所でどんな人たちが何を考えどんな暮らしをしていたか、本に書いてあることをヒントにして自由に空想してみてください。案外、昔の人も、現代を生きるあなたや私と同じことを考えていたのかもしれません。

## 目次

はじめに	2	<b>【縄文の遺跡】</b>		<b>【中世の遺跡】</b>		巻末エッセイ	60
<b>【遺跡について】</b>		松島湾の縄文時代	19	伊達政宗が残した文化	45	索引	62
遺跡	7	貝塚から出土する遺物	20	瑞巖寺・円通院	46	おもな参考文献	63
遺跡の種類と数	8	里浜貝塚	22	雄島	48		
遺跡の調査	10	大木田貝塚	24	瑞巖寺学芸員の話	49		
遺跡の保護	12	西の浜貝塚	25	観瀾亭	50		
		製塩土器で塩を作る	26	医王寺薬師堂	51		
<b>【松島湾について】</b>		発掘調査の専門家の話	28	えんずのわり	52		
松島湾	15	<b>【古墳・律令時代の遺跡】</b>		月浜の海苔漁師の話	53		
松島湾の特徴	16	政治・軍事拠点の多賀城	31	<b>【近代の遺跡】</b>			
松島湾の地形	17	古墳・墓	32	貿易と戦争	55		
		蝦夷	33	白石廣造邸跡	56		
		多賀城	34	野蒜築港跡・東名運河・貞山運河	57		
		多賀城碑・多賀城廃寺	36	多賀城海軍工廠	58		
		歌枕	38				
		春日窯跡群	39				
		江ノ浜貝塚	40				
		鹽竈神社・志波彦神社・御釜神社	42				

## 遺跡について

HISTORICAL SPOT



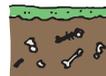
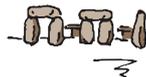
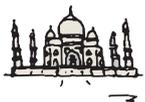
### 遺跡

現代に残された形ある資料をもとに、過去の人々の暮らしや社会のあり方を探る学問を考古学といいます。考古学の資料となるものには、土器、石器、埴輪、生活雑貨など持ち運べるもの（「遺物」）と、建物の基礎や古墳、製塩炉や炭窯の跡など持ち運べないもの（「遺構」）があり、これらが残された場所を「遺跡」とよんでいます。

## 遺跡の種類と数

多くの遺跡は土の中に埋まっていて、見つからないものがたくさんあるので、その数を数えることはできません。また、いくつかの遺構をまとめて一つの遺跡とみなす場合もあるなど、遺跡の範囲の捉え方にもさまざまなケースがあります。文化庁の資料では、国内で遺跡として認識されている場所（「周知の埋蔵文化財包蔵地」）を約46万ヶ所としています。

遺跡は、いくつかのタイプに分類されます。おもなものに、複数の住居跡や貝塚など人が集まって暮らしていたことがわかる「集落遺跡」や、製塩炉跡や製鉄炉跡などの「生産遺跡」、古墳やお墓などの「埋葬遺跡」などがあります。ただし何らかの生産の痕跡が見られる集落跡や、そもそも何に使われたかわからない遺跡もあり、すべての遺跡を明確に分類できるわけではありません。



## 遺跡の調査

遺跡は文化財保護法で守られていて、誰でも自由に掘っていいわけではなく、発掘に際しては法に基づいた手続きが必要になります。

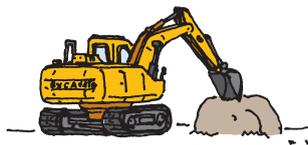
発掘調査には、学術的な研究を目的として大学や博物館などが実施する「学術調査」と、土地利用のために壊される遺跡の記録を残す「記録保存調査」があります。

遺跡において、遺物が埋まっていた位置関係や向きも、考古学上の重要な資料です。発掘調査によって遺物を取り出すことは、遺跡の状態を破壊することにもなります。そのため、発掘調査に際しては、遺物を掘り出すだけでなく、写真や図などによって埋蔵状況を細かく記録する必要があるのです。

発掘された土器などの遺物は壊れていることが多いので、発掘場所や周囲の状況を記録した上で、復元や拓本（土器の文様などを墨で写し取ること）を行います。さらに、得られた記録・図面などを整理して、発掘の成果を報告書にまとめることによって、調査の完了となります。



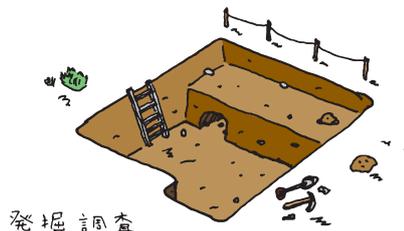
## 遺跡の保護



遺跡の多くは土に埋もれているため、地上からはその存在すらわからないものがほとんどです。したがって、農地開発や宅地造成、道路や鉄道の整備などに伴う工事で破壊されてしまう可能性があります。しかし一方で、工事によって広範囲が掘り起こされ、貴重な考古資料の発見につながる場合もあります。

発掘調査によって露出した遺構は、多くの場合、砂や土で覆って保護されたうえで、遺構を壊さないように土地利用が図られます。遺構の破壊を免れない場合は、調査によって詳細な記録・報告書が作成されます。

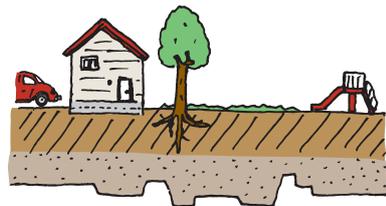
国や県では、ひとつひとつの遺跡の重要性を検討し、特に保存すべきものを「特別史跡」「史跡」として指定し、その場で建物を復元して展示したり、公園などの形にして保護・保存したりしています。



発掘調査



記録・報告書

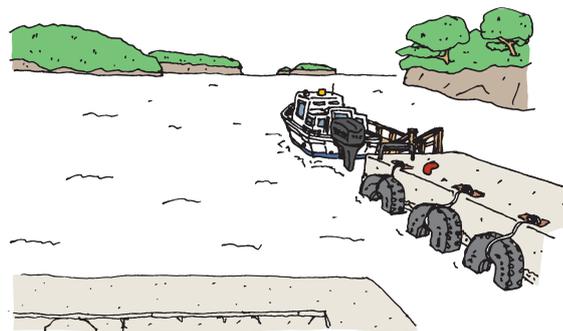


砂や土で覆って保護する



## 松島湾について

MATSUSHIMA WAN



## 松島湾

日本三景のひとつに数えられる「松島」は、宮城県沿岸部のほぼ中央に位置する松島湾とそこに浮かぶ大小約260の島々、湾周辺の丘陵地帯を含めた地域・海域を指しています。その美しい景色は、伊達政宗や松尾芭蕉が愛したことでも知られています。



## 松島湾の特徴

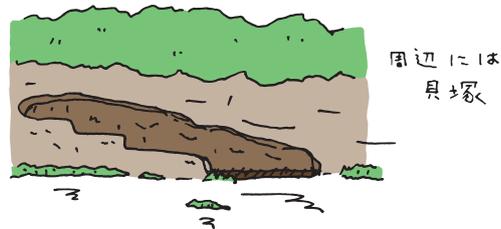
今から1万年ほど前、現在の松島湾内およびその周辺は大部分が陸地でした。約9000～7000年前の海面上昇（「縄文海進」）によって、現在とほぼ同じ形の松島湾ができました。その後、湾内に流れ込む川の規模が小さいため運び込まれる土砂が少ないことから、陸地がほとんど拡大せず、松島湾の海岸線や島々の様相が大きく変わらなかったと考えられています。

## 松島湾の地形

何千年もの間、大まかな地形が変わらなかった反面、松島湾沿岸部や湾内に浮かぶ島々は波や風雨にさらされ続け、崖や洞穴などさまざまな地形が形成されてきました。清水洞窟（七ヶ浜町）や大代洞窟（多賀城市）、崎山洞窟（塩竈市）、浜田洞窟（利府町）などではそのような天然の地形を利用した生活や生産活動が営まれていたと考えられ、貝塚や製塩土器、人骨などがみつかっています。

### 浜田洞窟

縄文～弥生時代  
の土器や人骨がみつか



## 縄文の遺跡

PREHISTORY



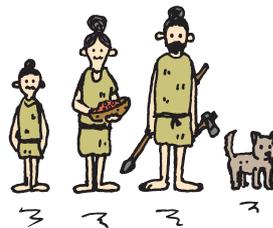
## 松島湾の縄文時代

宮城県内には縄文時代の貝塚が210ヶ所ほど発見されていますが、そのうち70ヶ所が松島湾周辺に集中しています。縄文時代を通じて地形があまり変わらなかったことが(P16)、狭い範囲で長い期間にわたって集落が営まれ、大規模なものも含む多くの貝塚が形成された大きな要因となっています。

貝塚などに残された情報から、縄文時代、この地域にはたくさんの人が住み、魚や貝、シカなどの獣、木の実や山菜などさまざまな動植物を食べて豊かな暮らしをしていたことが推測されています。

また、縄文時代以降の製塩の痕跡が多く見つまっているのもこのエリアの特徴です。

狩猟・採集で  
生活。木を食いつ  
いた痕跡もある。



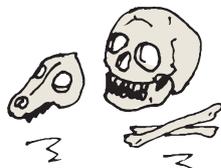
## 貝塚から出土する遺物

貝塚は、昔の人の暮らしを知る大きな手がかりになる遺跡です。日本の土は酸性が強く、生き物の骨などは分解されてしまうことが多いのですが、貝塚では貝殻のカルシウム分によって土が中和されるため、骨や角なども良好な状態で発見されるのです。

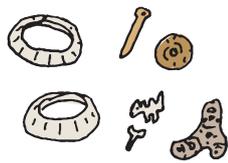
貝塚には、当時の集落で食べた物のゴミや使った道具などが下から順に堆積しています。貝塚の層を重なっている順に発掘し、そこに含まれるものを分析することで、四季の食べ物や、使っていた道具の移り変わりを時間軸に沿って読み取ることができます。このとき、出土した貝殻のしま模様を観察することで、その貝が採取された季節がわかり、その貝を含む層ができた時期を推測できます。



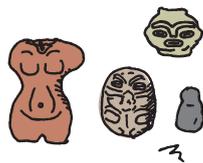
1. 土器の破片



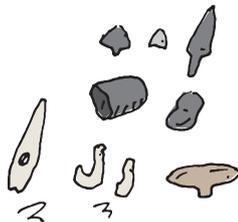
2. 埋葬された骨



3. 装飾具



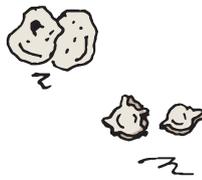
4. 土偶・石偶・石棒



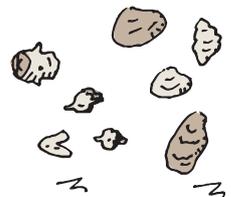
5. 骨角器・石器



6. 動物の骨



7. イルカ・クジラの骨



8. 魚の骨・貝殻

## 里浜貝塚

松島湾沿岸の貝塚は、大きく宮戸島遺跡群、松島遺跡群、七ヶ浜遺跡群の3つのエリアに分けられ、各遺跡群の代表的な貝塚として、里浜貝塚（東松島市）、西の浜貝塚（松島町）、大木岡貝塚（七ヶ浜町）があります。

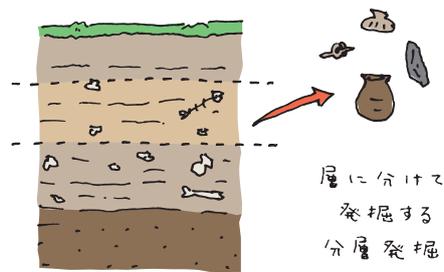
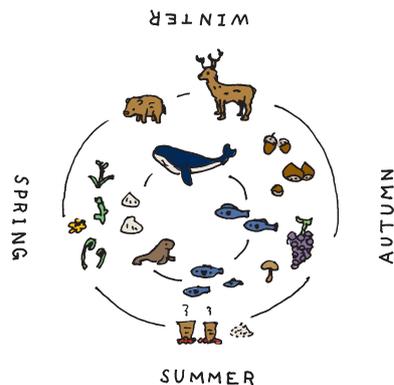
松島湾周辺の貝塚は堆積状態がよいのが特徴です。特に宮戸島西部の丘陵から低地に広がる里浜貝塚はその規模が大きく、貝層の厚いところでは6mにおよびます。明治時代にはその名を全国的に知られ、以降、考古学的に重要な研究の舞台となってきました。

この貝塚では大正時代、東北帝国大学（現在の東北大学）の研究者らにより国内初の本格的な分層発掘<sup>\*</sup>が行われました。この調査は、土器の形式を時系列で整理する「土器編年」の先駆けとなりました。

また、1979年から東北歴史資料館が実施した緻密な分層発掘、詳細な分析により、漁や狩猟、木の実の採集など、縄文人の季節ごとの生業や食生活の実態が明らかになりました。

<sup>\*</sup> 貝塚などの遺跡を層に分けて発掘調査すること。層ができた時代を順にたどって考察することができる。

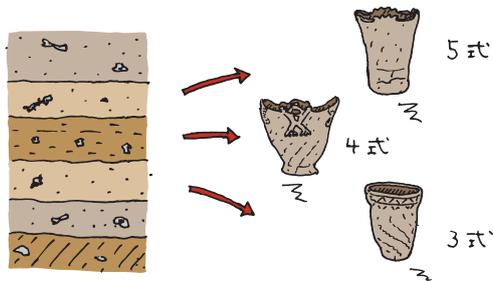
食料の季節による変化



## 大木囲貝塚

現在の七ヶ浜町の標高約38mの丘陵上で、縄文時代の前期・中期（4000年前ぐらいまで）に営まれた集落跡です。縄文時代の後期以降には、七ヶ浜半島の拠点的な集落は、大木囲貝塚の東に位置する二月田貝塚にがでの場所などに移ったと考えられます。

「だいがこい」の名は、縄文土器の形の変化の研究において重要なキーワードとなっています。1927年から東北帝国大学の研究者によって進められた発掘調査・研究では、この地域で出土した土器がその形態や素材、文様、出土した層の年代によって「大木1式」から「大木10式」にわけられました。それ以降この分類が、東北地方南部の縄文時代前期・中期の土器型式を整理する基準となったのです。

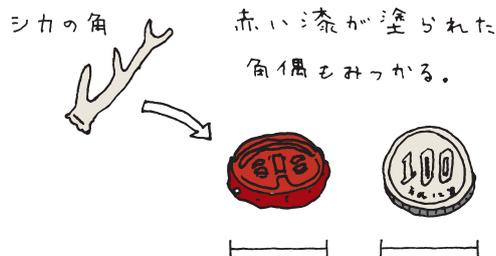


## 西の浜貝塚

松島湾の湾奥部の代表的な貝塚です。このエリアでは縄文時代の途中まではやや標高の高い道珍浜貝塚の場所に拠点的な集落がありましたが、その後、西の浜貝塚の場所に移ったものと考えられます。

西の浜貝塚の一部では、奈良・平安時代の製塩土器、製塩炉が発見されています。その周囲には海藻を焼いたような灰の層があることから、海藻を焼いて製塩するという手法も使われた可能性が考えられます。なお、古代の製塩跡が見つかったのは、東北地方では西の浜貝塚が最初でした。

西の浜貝塚ではほかにもシカの角で作られた人形かくくう「角偶」やクジラの骨でできた「骨刀」など貴重な資料が出土しています。

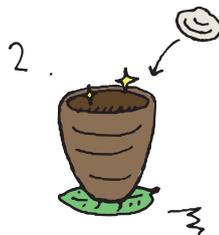


## 製塩土器で塩をつくる

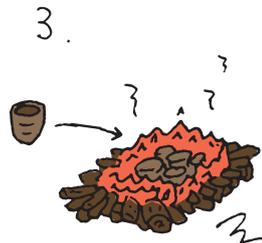
縄文人にとって塩づくりは夏の時期の大切な仕事でした。製塩土器は一度塩を炊くとヒビが入ってしまい、使い回しができません。そのため、たくさんの製塩土器が作られました。



粘土質の土をこねてひも状にし、重ねていく。熱が通りやすいようになるべく薄く作る。



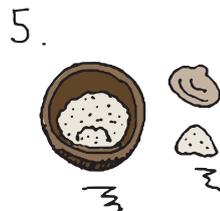
全体に火が回りやすいように先細りの形にする。内側は貝殻できれいに磨き、細かいすきまを埋める。



器を野焼きする。焼く前にしっかりと自然乾燥させないと割れるので注意。



完成した器に海水を注ぎ、煮詰めていく。塩ができるまで何時間もかかる。大量の燃料（まき）が必要。



シャーベット状に塩ができる。土器の内側にこびりつくのは塩ではなく炭酸カルシウムなどの物質。

### 奥松島縄文村歴史資料館館長

#### 菅原 弘樹さん（1962年生まれ）の話

中学生のとき、自由研究のために貝塚に行ってみた。そこに発掘中の穴と掘り出した土の山があって、土器や魚の骨が埋まっていた。自分と関係ないと思っていた縄文時代の人たちの生活の痕跡が目前にあって、純粋に「すごえなあ」って思った。

本格的に発掘に関わるようになって、出土した骨に石器で解体した跡があったり、壊れた道具を直した痕跡が見つかったりして、調べれば調べるほど、縄文人の暮らしぶりや考え方が想像できるようになった。それで、ますます発掘にのめり込んだね。

それと、出土した瞬間って、赤く塗ってある土器は本当に赤いし、骨角器はツヤツヤなの。空気に触れるとくすんでくる。数千年前に埋まった時と同じ色を見られるのも、貝塚を掘っている人間だけの楽しみなんだよね。

貝塚からは、その土地に起きた災害の歴史もわかる。それを明らかにして発信するのは土の中を調

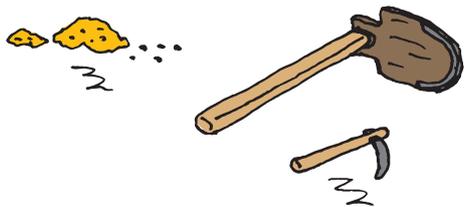


べている我々の責任だと思う。縄文人の集落があった場所って、2011年の津波の被害が及んでいない。彼らは海辺で漁や塩づくりをして、丘の上で暮らしていた。まさに震災復興のキーワードになっている「職住分離」なんだよね。それに、「持続可能な暮らし」を実践していたのも縄文人。四季の自然に向き合い、自然の恵みは自然に返し、壊れた道具は直して使いながら、豊かな暮らしを1万年以上も「持続」した。

もちろん我々が縄文の生活に戻ることはできない。でもこれからの生き方を考える上で、そういう祖先の暮らしぶりを知り、生かすことが「遺跡から学ぶ」ってことなんじゃないかな。

## 古墳・律令時代の遺跡

ANCIENT HISTORY



## 政治・軍事拠点の多賀城



7世紀後半から8世紀にかけて現在の近畿地方に成立した律令政府は、直接支配による中央集権国家の実現を目指し、支配領域を広めていきました。律令政府が東北地方をおさめるための拠点として724年に創建したのが「多賀城」です。行政組織である国府と、軍事拠点である鎮守府が置かれていました。

水もれを防ぐ

内側を「すず」で  
コーティングした  
東北地方の土器。



## 古墳・墓

古墳時代（3～7世紀）を通して松島湾周辺に大きな古墳は見つかりませんが、7世紀ごろの横穴墓群（山の斜面に多数の横穴を掘って墓室とする）が点在しています。菅谷横穴墓群（利府町）、大代横穴墓群（多賀城市）のように地元の有力者が作ったと思われるものや、矢本横穴墓群（東松島市）のように移民\*が中心になって作ったと思われるものがあります。その違いは、横穴の形や、そこに残された土器の特徴から推測されます（P33 イラスト）。

横穴墓群の墓室は、中世の僧の修行の場となるなど、後の時代に再利用された場合も多いようです。

\* 律令政府によって関東地方や中部地方などから東北地方に移住させられた人々を「柵戸（さくこ）」という。矢本横穴墓群周辺には関東系の特徴を持つ墓穴や土器が多く見られる。



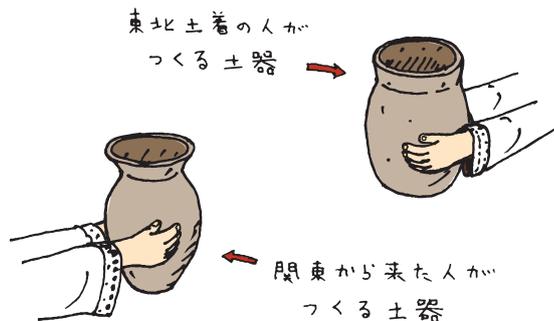
## 蝦夷

農耕も活発だった



律令政府は、現在の東北地方を中心に、政府の支配の及ばない地域の人々を一括して「蝦夷」とよび、支配下にある人々（「倭人」とは異なる習俗を持つ野蛮な集団とみなしました。これはあくまで律令政府側が用いた呼称です。東北地方に住む人々が共通した文化を背景に自ら「蝦夷」を名乗っていたわけではありません。

律令政府は柵戸（P32）を蝦夷と同じエリアで生活させるなどして、蝦夷の社会をコントロールしようとしました。また、蝦夷をもてなしたり、武力で制圧したりして、次第に東北地方を支配していきました。

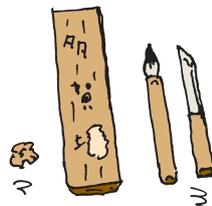
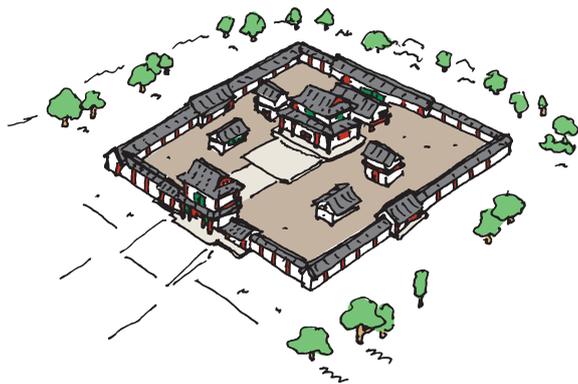


## 多賀城

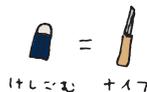
律令政府は724年、東北地方を制圧・統治するための拠点として多賀城を設置しました。その場所には現在、行政の中心施設である政庁や、施設を取り囲む築地、大きな門などの跡が残されています。また発掘調査によって、食料調達に関連する役所の書類うるしがみもんじよ もつかん（漆紙文書や木簡）や、兵士が使った武器などが出土しています。

多賀城跡の近辺には、役人の住居や整理された道路網、製鉄所や工房などの跡が残されており、都市計画的な整備がなされたことがわかります。また、多賀城設置以降、松島湾周辺の地域は、多賀城の運営を支える生産活動（塩づくり、瓦づくりなど）や、政府と地元民との争い、中央の文化と在来文化の融合などを経験していくこととなり、このエリア一帯にそれらの痕跡が残されることとなります。

不要になった文書を  
漆の容器の蓋に再利用



誤字は削り、  
修正した



## 多賀城碑・多賀城廃寺

多賀城南門跡のすぐ近くに高さ約2.5mの石碑があり、木造の小屋（<sup>ふくどう</sup>覆堂）で保護されています。762年に多賀城が改修されたことを記念する碑と考えられ、多賀城が724年に創建されたことを示す唯一の文字資料となっています。江戸時代初期に発見され、かねて歌枕（P38）として知られていた「<sup>つぼいし</sup>壺の碑」にあたりと考えられるようになりました（青森県にある碑を「壺の碑」とする説もあります）。

多賀城跡の南東にある多賀城廃寺跡は、多賀城の付属寺院として創建された寺の跡です。国府が主催する仏教行事「<sup>まんどうえ</sup>万灯会」などを司っていたと考えられますが、寺の名前は正確にはわかっていません。付近の遺跡から「万灯会」に用いたとみられる土器が大量に出土し、その土器に「観音寺」の記載があることから、それが寺の名前ではないかと推測されています。



江戸時代に発見された多賀城石碑の偽もののうさもあった……。

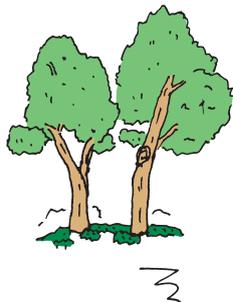


## 歌枕

多くの和歌に詠まれ、その風景のイメージを伴って知られるようになった地名や名所を「歌枕」といいます。律令政府に任命されて都からはるばるやってきた役人たちが東北の景色の美しさを都の人に語り伝え、あるいは歌に詠み、その景色のイメージが歌のフレーズとして定着していったのです。

江戸時代、それらの歌枕が実際には何を指すのか、ということを整理するため、仙台藩が領内の名所を調査しました。この結果、多賀城周辺や松島湾周辺には「末すえ まつやまの松山」、「壺おしまの碑 (P36)」、「雄島 (P48)」、「籬島まがきじま」など多くの歌枕が定着することとなりました。

松尾芭蕉も  
言われた末の松山



## 春日窯跡群

利府町春日周辺すずりさわかまあと おおかいの、硯沢窯跡、大沢窯跡、大貝窯跡などいくつかの遺跡が分布しているエリアが春日窯跡群です。エリア内では須恵器や瓦、木炭を生産したたくさんさんの窯跡が見つっています。窯跡からは多賀城跡から出土する瓦と同様の瓦が見つかり、古代多賀城に瓦を供給していたことがわかります。

さらに、大貝窯跡では中世の製鉄炉跡や炭窯跡が、大沢窯跡では江戸初期の瓦生産を示す資料が見つかり、このエリアがさまざまな時代に生産拠点として機能したことを物語っています。なお大沢窯跡の近くには「瓦焼場」という地名も残っています。

複製の検出口がある  
ことから「ハッ目ウナオ」  
ともいわれる炭窯。



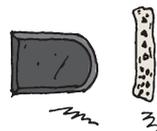
## 江ノ浜貝塚

松島湾周辺には縄文時代から平安時代にかけての製塩遺跡が多数発見されていて、奈良・平安時代のものだけでも140ヶ所ほどあります。多賀城跡で製塩用の薪を運ぶ人夫に関する文書などが見つかったことから、松島湾域では国府・多賀城の管理のもとで塩づくりが行われていたと考えられています。

松島湾周辺の古代の製塩施設の中でも中核的であったと思われる施設跡が、宮戸島の江ノ浜貝塚で見つかりました。ここでは厚手のものと薄手のもの2種類の製塩土器が2ヶ所に分かれて出土しています。このことから、海水を煮詰める「煎熬<sup>せんごう</sup>」と焼き固める「堅塩作り<sup>かたしお</sup>」の作業を、場所と道具を変えて行っていたと考えられます。

江ノ浜貝塚ではほかにも、役人が身につける腰飾りなど、国府多賀城との密接な関わりを示す資料が見つっています。

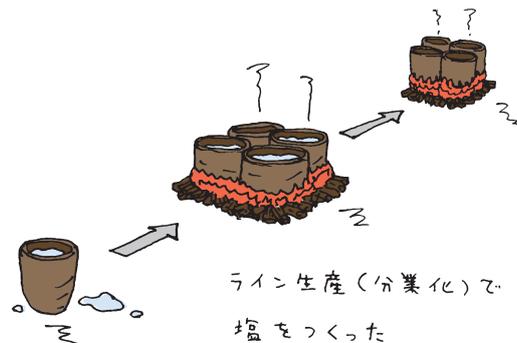
煎熬<sup>せんごう</sup>の効率を  
考えられた道具



役人の帯の食卓りや  
占いの道具の骨が  
みっかる



多賀城直轄の  
製塩施設だと  
みられている



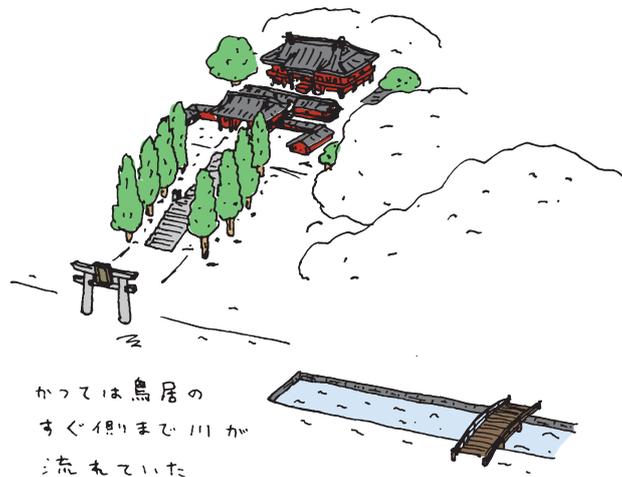
ライン生産(分業化)で  
塩をつかった

## 鹽竈神社・志波彦神社・御釜神社

毎年多くの初詣参拝者が集まることで知られるしおがま鹽竈神社ですが、その創建時期や、創建時の祭神については明らかになっていません。平安中期の法令集『延喜式』に、国税から「鹽竈神」に多額の祭祀料を納める記載があることから、その頃にはすでに政府の崇敬を受ける大きな神社であったことがわかります。また、不明だった祭神は、仙台藩4代藩主・伊達綱村の時代に作成された「鹽竈神社縁起」で左宮・たけみかづちのかみ武甕槌神、ふつぬしのかみ右宮・経津主神、別宮・しおつちおじのかみ鹽土老翁神と定められました。

志波彦神社はかつて岩切（現在の仙台市宮城野区岩切）にあった神社で、『延喜式』にその名が記載されています。1874年に鹽竈神社境内に移されました。

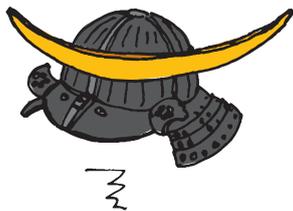
鹽竈神社の祭神のうち鹽土老翁神は人々に製塩法を伝えたとされており、同神のもたらしたという4つの竈を祀っているのが鹽竈神社末社の御釜神社です。同社では毎年、もしおやきしんじ鹽土老翁神が伝えたといわれる製塩法にちなんだ「藻塩焼神事」が開催されています。



御釜神社に祀られている神釜

## 中世の遺跡

MEDIEVAL HISTORY



## 伊達政宗が残した文化

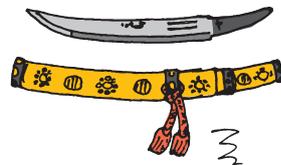


仙台藩の礎を築いた伊達政宗は、仙台城の築城、および八幡宮（のちの大崎八幡宮）や瑞巖寺の造営にあたって、上方から大工や絵師、彫刻家を招き、装飾性に富んだ桃山文化の要素を取り入れました。

政宗の没後も、2代藩主忠宗が政宗の霊廟として造営した瑞鳳殿（仙台市）、4代綱村から5代吉村にかけて再建された鹽竈神社社殿などのきらびやかな装飾に、政宗の感性が受け継がれました。

松島は古代から霊場として知られ、中世には仏道修行を志す者たちが訪れましたが、藩政時代に編纂された「松島眺望集」や松尾芭蕉の「おくのほそ道」などの刊行を経て次第に観光地としての色彩を強めていくことになりました。

伊達政宗の  
20回忌に作ら  
された大月笄



## 瑞巖寺・円通院

瑞巖寺の前身は828年に慈覚大師じかくだいしえんにん円仁によって開創された天台宗の「青龍山延福寺」であるとされ、鎌倉時代に臨済宗の「円福寺」となり、江戸初期に伊達政宗によって再建されて「瑞巖寺(青龍山瑞巖円福禅寺)」となりました。

それから約400年が経ち、瑞巖寺では2008年から「平成の大修理」が実施されました。工事に先立って実施された発掘調査では円福寺の基礎などが見つかり、円福寺の伽藍配置などが推定できるようになりました。また、瑞巖寺本堂の基礎部分に板碑いたびや五輪塔ごりんとうなどが埋め込まれているのが見つかり、瑞巖寺建造時にそれ以前の信仰物を建築資材として転用したことがわかりました。



瑞巖寺に隣接する円通院は、仙台藩2代藩主忠宗が早逝した息子・光宗の菩提寺として造営したものです。光宗の霊廟さんけいでん・三慧殿の内部には慶長遣欧使節・支倉常長が持ち帰ったという西欧風のデザインが取り入れられているため、江戸幕府の鎖国政策下ではその扉が開けられることはなかったそうです。



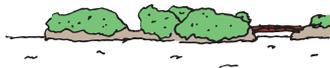
瑞巖円福禅寺と  
記された扁額



バラの花など  
西欧の影響を  
受けた意匠



## 雄島



南北 200m、東西 40m ほどの細長い島です。かつて松島はその景観から「極楽浄土に近い場所」と捉えられ、霊場としての性格を強く持っていました。なかでも雄島は「あの世とこの世の境界点」として松島の中心的な存在だったと考えられています。

12 世紀のはじめ、見仏上人けんぶつしようにんとよばれる僧が雄島に庵を設け、12 年間法華経を唱え続けた結果、瞬間移動や鬼神の使役などの法力を得たという伝説があります。その後、見仏上人と縁を結んで成仏するため雄島に火葬骨を納める風習が生まれたと考えられています。明治時代までその風習は続きました。雄島の土には今もその名残の骨片が見られます。

また雄島には板碑とよばれる供養塔が 70 基ほど残されていて、周辺の実地からはさらに大量の板碑が見つかっています。これは 13 世紀から 15 世紀に人々が成仏を願って立てたもので、やはり雄島が宗教的な中心地になっていたことを物語っています。



そ

## 板碑の研究を続ける瑞巖寺学芸員の 新野 一浩さん（1965 年生まれ）の話

以前、ある調査をきっかけに雄島の近くの海底を調べたら、たくさんの板碑が出てきたんです。びっくりして、2006 年から雄島の周りの海に沈む板碑を集め始めました。潮が引いて干潟になったときに泥の中を探すんです。大学の先生や学生さんたちと一緒に 2018 年まで続けて、見つけた資料は破片も含めると 3500 点以上。私たちは、雄島にはのべ 800 基ぐらいの板碑が立てられたのではないかと推測しています。新たな資料が見つかって、過去の雄島の様子について想像が広がるのは楽しいですね。

本当はもっと探したいんだけど、すでに集めた分の拓本を取ったり、計測したりして資料として整理しなければならない。それが中世の瑞巖寺の歴史を明らかにすることになるわけですから。あと何年かかるかわからないけど、その作業が続きます。相手はただの石の破片です。私みたいなマニアックな人間がいないとできないよな、と思っています（笑）。

## 観瀾亭

仙台藩主の納涼・観月の場として「月見御殿」ともよばれた建物です。もとは豊臣秀吉の伏見城にあった茶室を伊達政宗がもらい受けて江戸の藩邸に移築し、それをさらに2代藩主忠宗が松島に移したといわれています。

「瀾」は「なみ」の意味で、「観瀾亭」の命名は5代吉村、室内に掛かる「観瀾」の文字は7代重村によるものです。松島湾の穏やかな水面とそこに映る月を愛でる場として、伊達家代々に愛されていたことがわかります。

江戸から移築



仙台藩お抱え  
狩野派の画家  
の作

## 医王寺薬師堂

宮戸島の多目的施設「あおみな」の裏手の山道を登ると、崖に掘られた2つの洞窟と井戸が見えてきます。さらに山道を進むと、鐘楼とこぢんまりしたお堂に着きます。

洞窟は、1222年に漁師の網にかかった薬師如来を安置した場所といわれています。1608年、鹿狩りをした伊達政宗がこの洞窟内で獲物を調理させたところ煮えなかったため海に捨てて帰ると、後日、その日に着ていた衣類が灰になっていたことから、政宗が薬師如来への信仰を強め、薬師堂を建立して里浜の医王寺の管理下に置いたと伝わっています。

鐘楼の鐘は戦時中に供出されましたが、その後宮戸島の住民によって奉納されたものが現在も据えられています。

煮ても煮えなくて  
海に捨てた...



## えんずのわり

### (国の重要無形民俗文化財)

宮戸島の月浜地区で200年以上続く伝統行事。毎年1月11日から16日まで、地域の小学2年～中学3年の男子が、最高学年の子を「大将」として岩屋で共同生活します。

これは農作物を荒らす鳥を追い払う「鳥追い」から始まった行事です。「本番」とよばれる14日夜には松の木の棒を持った子供たちが各戸を巡って「えんずのわりとりょうば、かずらわってすをつけて…(意地の悪い鳥を追えば、頭を割って塩をつけて…)」と唱えて厄払いします。さらに訪ねた家の職業や家族構成に合わせて「達者で長生きするように」「大漁するように」など祈願します。家々ではご祝儀や収穫物(米、海苔など)を準備し、一家総出で正座して子供たちの祈りを聞きます。

2020年現在、地域の子供が減っていることで、今後の実施のあり方が検討されています。



## 月浜の海苔漁師・山内健史さん (1982年月浜生まれ、月浜在住)の話

俺らの頃は年の近い子がけっこういたから、みんなで泊まるのも、秋から毎週集まって共同生活で使う薪の準備をしたりするのも、楽しかったんです。毎年あたりまえにやってくる行事だし、嫌だと思っただこともなかったですね。

今年(2020年)はうちの長男(中1)を含む2人。以前は全部大将の指示で動いていたけど、今は子供たちの年が離れているから、やり方を受け継いでいくのも難しい。だから俺ら大人も、最低限のサポートはしています。なるべく口を出しすぎないように気をつけながら。

地域に根付いてきた行事だから、俺としては子供たちがいるうちは続けたいんです。でもこのままだと、ウチの次男(4歳)で終わり。それまでに子供が増えればいいですが、それなければ、どうするのか。みんな考えていけばいけないですね。

\* 年齢・学年は2020年1月現在

## 近代の遺跡

MODERN HISTORY



ろ



て

## 貿易と戦争

塩釜や松島、浦戸諸島の港には、江戸時代には幕府や仙台藩の物資を積んだ船が、明治時代以降は海運会社の船が入りし、仙台圏の海の玄関口としての役割を果たしてきました。そのため湾域には、貿易による繁栄の跡が見られます。

また、明治時代の殖産興業策や昭和時代の国家総動員体制といった社会情勢の変化はこの地域にも大きな影響をもたらしました。近代的な港湾の造営、大規模な軍需工場の設置といった国策により、湾域の様相も変化していくことになります。

日本海軍の印が  
記された消火栓  
が残る

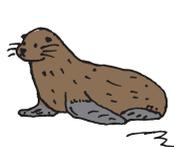


ろ

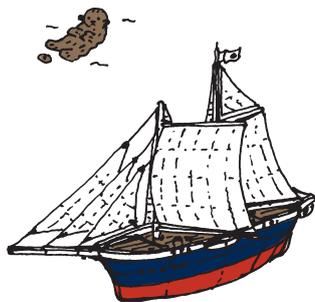
## 白石廣造邸跡

1871年、桂島の石浜に「白石商会」という海運会社ができ、石浜港は流通の要所として栄えました。白石商会の創始者である白石廣造<sup>しらいしこうぞう</sup>は、海運業のほかにかつオ、マグロ、タラ、マスなどの遠洋漁業に力を入れ、さらに1901年からは北方でラッコ漁を営みました。当時、ラッコの毛皮はヨーロッパで防寒具として珍重され、高値で取引されていたのです。

白石氏は北海道や関東、関西との貨物航路を開き、また蚕業<sup>さんぎょう</sup>の奨励、米の改良などによって東北振興に尽力しました。現在、石浜には氏の屋敷跡、庭園の石灯籠<sup>いしどうろう</sup>が残されています。



船台でラッコや  
オットセイを  
つかまえる

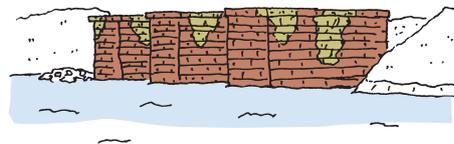


## 野蒜築港跡・東名運河・貞山運河

明治政府の殖産興業政策のもと、鳴瀬川の河口周辺で1878年に始まった近代港湾建設事業が「野蒜築港<sup>のびるちつこう</sup>」です。突堤などの港湾施設に加え、下水道や測候所などを備えた近代的な市街地を建設しましたが、港内への土砂の堆積などの問題点を解決できず、1885年、工事は中止されました。

この事業に伴って建設されたのが、松島湾と鳴瀬川を結ぶ「東名運河<sup>とうな</sup>」と、鳴瀬川と北上川を結ぶ「北上運河」です。さらに江戸時代から明治時代にかけて開削された貞山堀<sup>とうな</sup>も改修されて「貞山運河」となり、松島湾を経て北上川と阿武隈川とを結ぶ水路が整うこととなります。

\* 江戸時代に開削された木曳堀（こびきぼり）、御舟入堀（おふないりぼり）、明治時代に開削された新堀（しんぼり）の総称。松島湾の南端（七ヶ浜町東宮浜付近）から七北田川河口、名取川河口を経て阿武隈川河口に至る。



## 多賀城海軍工廠

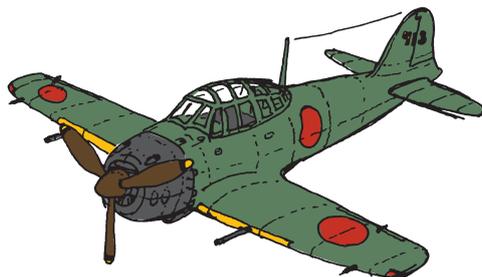
海軍工廠は、大日本帝国海軍直属の軍需工場です。太平洋戦争の開戦により艦船、航空機、弾薬などの兵器の増産が必要になった海軍は、多賀城など全国7ヶ所に新たに海軍工廠を設置しました。

1943年に設置された多賀城海軍工廠には、おもに航空機用の機関銃を製造する「機銃部」と焼夷爆弾や照明弾などの弾薬をつくる「火工部」が置かれました。終戦後は占領米軍の管理下に入り、米軍撤退後は機銃部跡地には各種工場が進出し、火工部跡地はおもに陸上自衛隊多賀城駐屯地となりました。

多賀城海軍工廠は関連施設の敷地も含めると現在の多賀城市域の4分の1にもおよぶ面積を占めていました。工具宿舍跡地が学校や役所になり、海軍工廠のために整備された水道が市域の上水道の土台になるなど、結果的に、戦後の多賀城のまちづくりを方向づける事業となりました。

米兵の落書きが  
残されていた

M. DARTY  
August 20, 1947  
Benny Wal drop  
Shupab  
ALSO WAS



航空機用の機関銃や  
弾薬などをつくっていた



## — 巻末エッセイ —

### 遺跡と犬と雨

利府町の春日付近にはずいぶん長い間、土器や瓦を作る窯があちこちにあったという。その痕跡を見たくて、ある晴れた日、スマートフォン（画面の大きい携帯電話。地図や天気予報なども見られる）で「春日大沢瓦窯跡」の場所を調べて行ってみた。何も見つけられず、犬と一緒に通りかかった男性に聞くと、彼は「かまあと？あの山のほうだな。でも、行ってもわかんないよ。以前は少し見えてたけど」と笑った。犬が僕を見ていた。犬の嗅覚はすごいらしい。この犬なら見つけてくれるかもしれないな、と思ったけどすぐに、僕はこの犬に「窯跡を見つけて」と伝える手段を持たないことに気づいた。

別の日、縄文時代の集落跡を訪ねたら雨が降ってきた。スマートフォンでチェックした限りでは降らないはずだった。仲間と『松島湾の遺跡図鑑』を作り始め、遺跡について調べるようになってからとい

うもの、現地に行こうとすると雨が降る。現地に着いたら降り出したこともある。晴れたのは窯跡を見つけれなかった日ぐらいだ。

土の中の縄文人たちが、雨嫌いの僕に「近寄らないで」と訴えているような気がした。でも彼らにとって雨が「恵み」であったとするなら、これは歓迎のサインかもしれないも思った。そんなことを思い始めてようやく僕は、ここが「人が暮らした場所」なら、「人が死んだ場所」でもあるということに気づき、数千年前の地中に眠る彼らに思いを馳せた。

この地で延々と世代を経た彼らは、なんでも知っていたのかもしれない。魚のおいしい食べかたも、エコな暮らしの続けたたも、面白い絵の描きかたも、災害からの立ち直りかたも。スマートフォンで天気や道を調べる方法は知らなかったかもしれない。でも雨の日と晴れの日の過ごしかたや、犬に探し物を依頼する方法は、きっと僕より知っていたんだろうな。今はそんな想像が楽しい。

2020年3月

『松島湾の遺跡図鑑』文章担当 加藤 貴伸

## 索引

<b>【あ】</b>	遺構	7,8,12	<b>【た】</b>	拓本	10,49
	板碑	46,48		鎮守府	31
	遺物	7,10		貞山堀	57
	延喜式	42		土器編年	22
<b>【か】</b>	海軍工廠	58	<b>【は】</b>	発掘調査	10,12
	角偶	25		文化財保護法	10
	堅塩作り	40		文化庁	8
	見仏上人	48		分層発掘	22
	国府	31		米軍	58
	骨刀	25		報告書	10
	五輪塔	46	<b>【ま】</b>	埋蔵文化財包蔵地	8
<b>【さ】</b>	柵戸	32		藻塩焼神事	42
	史跡	12	<b>【や】</b>	横穴墓群	32
	縄文海進	16	<b>【ら】</b>	律令政府	31,33,34
	炭窯	7,39			
	製塩土器	17,40			
	製塩炉	7,8,25			
	煎熬	40			

## おもな参考文献

「多賀城市史Ⅰ」多賀城市史編纂委員会編（1997年、多賀城市）「蝦夷—古代エミシと律令国家—」（2019年、東北歴史博物館）「考古学がよくわかる事典」國學院大學考古学研究室編（2010年、PHP研究所）「旧多賀城海軍工廠の調査」多賀城市教育委員会編（2015年、多賀城市文化遺産活用活性化実行委員会）「考古学の教室 ゼロからわかる Q&A65」菊池徹夫著（2007年、平凡社新書）「遺跡から調べよう！旧石器・縄文時代」設楽博己著（2012年、童心社）「奥松島物語 第2号」（2014年、奥松島物語プロジェクト）「宮城県の貝塚」東北歴史資料館編（1989年、宮城県文化財保護協会）「大木式土器の世界」（2018年、七ヶ浜町歴史資料館）「総覧 縄文土器」小林達雄編（2008年、アム・プロモーション）「縄文の列島文化」岡村道雄著（2018年、山川出版社）「松島町文化財調査報告書第1集 西の浜貝塚」（2008年、松島町教育委員会）「発掘された日本列島 2017」文化庁編（2017年、共同通信社）「古代蝦夷と律令国家」蝦夷研究会編（2004年、高志書院）「東松島市文化財調査報告書第11集 矢本横穴墓群 第12次・13次調査」（2015年、東松島市教育委員会）「歌枕とうほく紀行」田口昌樹著（2004年、無明社出版）「古墳時代史の展開と東北社会」菊地芳朗（2010年、大阪大学出版会）「塩竈・松島その景観と信仰」瑞巖寺・塩竈神社・東北歴史博物館編（2008年、東北歴史博物館）「鹽竈神社」押木耿介著（2005年、學生社）「瑞巖寺と伊達家 第三部」（1996年、瑞巖寺博物館）「えんずのわり解説書」（2012年、宮城県地域文化遺産復興プロジェクト実行委員会、えんずのわり保存会）「瑞巖寺の歴史」（1997年、瑞巖寺）「松島湾の船図鑑」9days DESIGN 編集（2019年、つながる湾プロジェクト）「縄文漁りのムラ 国史跡里浜貝塚」（奥松島縄文村歴史資料館）「貞山運河」（多賀城市教育委員会）「東名運河」（文化庁）「赤井官衙遺跡群 赤井官衙遺跡と矢本横穴」（奥松島縄文村歴史資料館）「春日窯跡群 硯沢窯跡」（利府町教育委員会）「瑞巖寺境内遺跡 瑞巖寺埋蔵文化財発掘調査現地説明会資料」（2011年、松島町教育委員会）「宮戸島の遺跡」菅原弘樹（2014年）「里浜貝塚が明らかにした縄文人の暮らし」菅原弘樹（2018年）「松島湾における縄文時代晩期の遺跡動態」小林圭一（2018年）「仙台湾沿岸貝塚の基礎的研究Ⅴ」後藤勝彦（2013年）

## 松島湾の遺跡図鑑

MATSUSHIMA WAN HISTORICAL SPOT GUIDE

---

2020年3月31日発行 初版

つながる湾プロジェクト発行

企画・編集・デザイン・挿絵

9days DESIGN

取材・文

加藤 貴伸

制作協力

菅原弘樹、谷野俊平、田村正樹、新野一浩、村田晃一、山内健史、米城百合子（50音順、敬称略）

---

つながる湾プロジェクト

「つながる湾プロジェクト」は、私たちが育ててきた松島湾とその沿岸地域の文化を再発見し、味わい、共有し、表現することで、地域や人・時間のつながりを「陸の文化」とは違った視点でとらえなおす試みです。

<http://tsunagaruwan.com>

---

●主催：つながる湾プロジェクト運営委員会、東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京

●協力：ビルドフルーガス、一般社団法人チガノウラカゼコミュニティ

※本事業は Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）です。